県本部通信

全日本建設交運一般労働組合広島県本部
〒七三〇-〇八五三
広島市中区堺町一丁目二-九-三〇三
TEL（〇八二）二三五-三〇五〇
FAX（〇八二）二三五-三〇五二
e-mail
ctg303.hiroshima@orange.plala.or.jp

久しぶりに全国の仲間と会い、学習し、懇談し楽しく交流できました。

広島で開催された「事業団・高齢者部会全国交流会」に地元からも参加、大いに学び交流しました

一〇月一七日（土）～一八日（日）の二日間、建交労の「第五八回事業団・高齢者部会・ヘルパー運動交流集会ｉｎ広島」が広島市内で開催され、全国から五一人が参加し、一日目は全体会と分科会、二日目は分科会が開催され、今後の運動の発展に向けて活発な議論が交わされました。広島県本部からは、広島、三原、尾道、福山、ダンプ支部から一三人が参加しました。

藤井さんのお話に涙し元気をもらいました

一日目の全体集会では、事業団部会の中村部会長と建交労中央本部の角田季代子委員長の主催者あいさつに続き、記念講演では原水爆禁止広島県協議会代表理事の高橋信雄さんが「廣島とヒロシマから加害と被害の歴史を学ぶ」と題して、日本の近現代史について、分かりやすくお話しされました。

また特別報告のなかで、三原支部の藤井康子書記長（福山事業団代表理事）が『懸命に生きて』と題して、自身が中国で生まれ、一〇歳で命からがら引き上げ、その後失対事業で働き、事業団で働き「人の役に立ちたい」の思いで運転免許を取得し、社会保険労務士の資格を取り、今日まで活動してきたことを振り返り、「失業と貧乏と戦争に反対とます建交労の綱領が輝きをます」と述べ、参加者に感動と共感を与えました。参加したある県の仲間は「藤井さんのこれまでの生きざまを聴き涙が出ましたし、私も元気をもらいました」と話していました。

翌日の午前中、二つの分科会に分かれて、話し合いました。山室まこと事務局長は「歴史を正しく認識しないといけない。藤井さんの話にも感動した。このままでよいのか、？改めてみつめ直すことが重要です」

（なお藤井さんの「懸命に生きて」は裏面に三回に分けて連載します）

中国から引き揚げ、失対・事業団活動と懸命に生きてきたことを発言する藤井康子さん（三原支部）

多業種組合員がいる建交労の強みが発揮される

一日目の終了後は、夕食交流会が行われました。コロナの関係で、大声で歌うことは避けて、建交労女性部と青年部が中心になって作成した、DVD「わしらの宝」を観ながら懇談・交流しました。

二日間の分科会では、事業団部会以外のダンプ、労職支部からの参加者も発言、「建設労働者の賃金については三〇年前から、市に申し入れ公共工事の現場労働者に聞き取り活動をしてきた」（北海道の参加者）や「軽貨物労働者の組織化をぜひ取り組んでほしい」（神奈川の参加者）など貴重な意見も出ました。

一日目の夕食交流会で挨拶する、中国地協各県から参加のみなさん（10月17日広島市内にて）

記念講演で「廣島とヒロシマから加害と被害の歴史を学ぶ」について高橋信雄さん（10月17日広島市内アークホテル）

二〇二一建交労春闘討論集会に広島から三名が参加

一一月二一日（土）～二二日（日）の二日間、静岡県伊豆長岡において「建交労二〇二一年春闘討論集会」が開催され、全国から七〇人あまり参加しました。

広島からは、ダンプ支部事務局長の武田喜成氏（県本部書記次長）と福山地域支部SEE物流分会の佐藤正之分会長と広島労職支部の大平文俊事務局員の三名が参加しました。

要求提出はたたかいの第一歩

リモート（オンライン）での参加者も二九名で、全体では一〇〇名近い参加者がありました。

春闘方針の提案で廣瀬肇書記長が「要求提出なくして賃上げはあり得ない、要求提出一〇〇%めざそう」と強調しました。

全労連の黒沢幸一事務局長から記念講演が行われ、その後首都圏集団交渉、全国トラック部会、鉄道本部などから特別報告が行われ、全体討論で1汚名が発言し、議論を深めました。（M）

懸命に生きて（第一回）

藤井康子（建交労三原支部書記長）

紹介いただきました藤井康子です。昭和一〇年生まれ八四歳です。現在の中国、白城子（はくじょうし）というところで生まれました。

生母は産後の肥立ちが悪く産後十一か月で亡くなり後入りの母に育てられました。父親は当時の満州鉄道で職を得ていました。「岸壁の母」にうたわれた引揚者です。

日本は、韓国を日本へ併合しさらに中国に侵略をはじめ、傀儡（かいらい）国家満州国を作り、「清」の皇帝をすえて康徳元年と年号を称したのです。康徳の康をとって康子という名前をつけたと父から聞かされました。

当時の国民は何も知らされず、日本が東洋の指導者になるのだと、国策に嬉嬉として励んでいたことが思われます。

昭和二〇年八月一五日を境に様子は一変し収容所生活に、八月九日ソ連の参戦により略奪、婦人への暴行、連行等恐怖の中を逃げまどい、女の人は頭を丸坊主にし顔には石炭の粉をぬって大連埠頭（ふとう）にたどり着きました。乗船を待つ間、背中におんぶされた赤ちゃんがひとり泣いていたのですが大勢の人で押され窒息死し、若いおかあさんは悲しみで打ちひしがれていたのを子供ごころに今でも強烈な思い出として頭にあります。

日本へ引き揚げて小学校に編入されてもほとんど登校しないままです。三人の弟が生まれ、父、母とも働いて子守りに明け暮れ貧困に極まっての状況です。遠足とか運動会、修学旅行等の行事、給食費等の学校からのプリントを家に出さずにソロっと休んだり、給食の時間は校庭に出てやり過ごしていました。

読み、書き、算数もできないままで新制中学を卒業したので就職もままならず、転々として失業対策事業に紹介されました。三六歳。間もなく全日自労の幹部から組合事務所のお茶沸かしや、清掃をと頼まれ、名前だけでいいから執行部にと（言われて）今日に至っています。（五八年間）

当時、三原市の失業対策事業の従事者一四〇〇人ぐらいで全日自労が七〇〇人執行委員会委員二五名ぐらいでした。組合とは何にもわからないまま、ストライキを行うことになっても私は現場に行くという状態です。

「失業と貧乏と戦争に反対」の全日自労の方針は私にピッタリと入り、それから懸命に働き、いまの「建交労誌」の前身「じかたび」新聞を現場配付することが役割でしたので勉強となり、「読み書き」をならいました。

組合員、非組合員といわず、病気、けが、事故、家族含めて年金等でいわゆる世話役活動にあけくれました。

組合事務所の近くに赤十字病院があったのですが「なかま」もお世話になっていて、血液がたらないといえば「献血」もと、自分で出来ることは何でもかんでも受け入れるような状態でした。

車の免許証を取得したのも昭和三八年「あっ！おなごが運転しよる」と振り返られる時代です。子供が保育所にお世話になっていて、朝一番の広島行き電車に乗って受験するため、保育所の先生に朝六時から子供を預けることをお願いしました。三原市にはまだ自動車学校もなく、新幹線もないときです。（二八歳）　―続く―

来年1月22日 発効となる（核兵器禁止条約）

核兵器禁止条約が来年の一月二二日にいよいよ発効します。一〇月二四日に中南米のホンジュラスが批准し、批准国が五〇か国に到達しました。その日から九〇日後に条約は拘束力を持ちます。

核兵器禁止条約は二〇一七年七月七日に国連で一二二か国の賛成で採択されました。

核兵器の開発・実験・製造、貯蔵、はもちろん核兵器で相手を威嚇（いかく）することも禁止されます。

戦争被爆国である日本の政府が、「核兵器禁止条約」を批准していないことが、世界や日本国内でも大きな批判を呼んでいます。日本政府に批准を求める署名の取り組みがスタートしました。（上の写真は広島で開催された署名のスタート集会）

今後の行動日程

一一・二六	広島労職支部定期大会 ヒロシマ革新懇世話人会
一一・二七	広島鉄道支部大会
一一・二八	ダンプ支部合同役員会
一一・三〇	呉市への要請・ダンプ支部
一一・三〇	広島県高齢者大会
一二・四	三原支部全員集会
一二・四	広島県春闘共闘討論集会
一二・六	広島支部定期大会
一二・二八	業務終了（御用納め）

県本部機関紙を発行、各支部のニュース等お知らせください

この度新しく建交労広島県本部の「組合機関紙」を発行することにしました。ずっと以前に、不定期で発行していたことはありますが、編集する人の退任等で、続きませんでした。

コロナ禍のなか、組合活動も制約がかかる中でも、運動は止めるわけにはいきません。

ダンプ・建設、労職、事業団・高齢者、運輸・トラック、鉄道などの県本部に所属する仲間のお互いの実情も理解し、運動を支えあう「交流の場」として発行することにします。

広島ダンプ支部ではこれまで「ダンプ通信」（毎月一回）を発行してきましたが、ダンプ支部だけの取り組みでは、記事に限りがあり、栃木県本部の機関紙のように、県本部全体のニュースの中にダンプ支部の記事も位置付ける形で発行することとしました。